

島の漁業後継者として

伊江漁業協同組合青年部
渡久地 政 廣

1. 地域の概要

私の住んでいる伊江村は、沖縄本島北部の本部半島から北西9kmに位置し、島の周囲は30kmにわたり海に囲まれ、農業と漁業を中心とした一島一村の離島であります。島のやや中心に矛先のような海拔172mの伊江タッチェウとよんでいる城山がそびえ、かつては沖縄八景第一位を誇り、昔から船乗りの標識として今も昔も旅人をいざなう風光明媚な島であります。村の人口は5,642人、島の唯一な交通機関は30分で行けるカーフェリーで本島と結んでいます。

2. 漁業の概要

表玄関である伊江港の近くに私達の伊江漁協があり、正組合員104名、准組合員40名、漁船128隻で構成されており、漁業形態は1トンから3トン階層の漁船による底延縄、一本釣、トビロープ曳、追込綱、刺綱、イカ釣、モズク養殖、定置綱を営んでおり、昭和57年度の生産量が535トン、金額にして3億2百万円となっています。

3. 研究集団の組織及び運営

昭和53年に伊江漁協青年部として30才以下の組合員及び漁村の子弟で設立し、部員数16名で構成され、不定期に漁業技術を始め流通改善をテーマに活動を続けています。

4. 活動課題選定の動機

私の父は、タカサゴを対象とした追込綱、冬場のイカ釣、砂糖キビの収穫などで私達兄弟を育ててきました。私も高校の頃までは父の手伝いをさせられてきたので父の苦勞を身近に見るにつけ、後を継いで漁師になるんだなど深く考えたことはなかった。

高校卒業後、島の軍施設で雇用員として働いておりましたが、特に都会へ就職していた友人達から都会の就職を聞くにつけ、いつのまにか都会への憧れが芽を吹き出し、友人を頼って東京へ就職したのである。2年程勤め望郷の念にかられ島に帰り、また再び都会へと旅立ち、幾たび本土を往復したことか……。

5年前のこと島の同期生4人と東京で働いていた頃、集まるたびごとに話題となるのは島の漁業のこと、年輩者で構成している追込網の組織先輩達が築いてきた伝統ある島の追込網漁業、話し合いのたびに漁業への考えかたがこれまでになく高まってきました。それから島へ帰ろうと痛感し、父とともに何とか漁師としてやっという決意したのであります。

5. 実践活動の状況及び成果

私は昭和53年に漁業に従事するようになったのであるが、一緒にUターンして来た三人の友人達も追込網やトビロープ曳で励んでいます。

漁業に従事するようになって4年余、まだ未熟であります。漁業は、考えていたよりはるかに厳しいものであった。まだ日の明けやらぬ早朝から出漁し、重労働の割には漁獲物が自らの労働にかみ合った価格で売れないという漁師の辛さ、厳しさを改めて思い知ったのであります。そのために何とか漁業経営の改善を図らなければならないと考えまして、昭和57年7月、追込網の時期解散と同時にトビウオを目的としたトビロープ曳を行なうため、漁業技術の優れた先輩からロープ曳網の仕立てから漁のしかたまで学び父と二人でその年の7月から8月まで島の周辺で操業を行なった結果、水揚量2,300kg、69万円の成果を得ることができたので、昭和58年度から本格的にトビロープ曳に取り組むことにしました。

私達親子の主要漁業は、3月から8月中旬まではトビロープ曳、8月から9月までは礁域内で行なうブダイ、アイゴ、ニザダイ等を主とした小型追込網、10月以降は刺網を行なっています。特に一隻で行なうトビロープ曳の構造と操業方法を簡単にのべます。

図1の網の構造は、9節の6本合わせ6反と、8本合わせ4反の計10反の網地で、浮子部分の長さが145K、沈子部が150K、ロープは片方400m、両方で800mとなっています。この漁具の作成は、網漁業の経験者であれば仕立ては難しい事ではないと思います。

理想的ともいえる操業は、図2に示すとおり潮流は東、風向は西から吹く場合、潮上からロープ、綱、ロープと投入し、両方のロープを交互にたぐりよせては投下し、これを繰り返しながら潮下に向って綱なりを正常に保ちながら円を描くように両端のロープをしぼって行き、輪を縮め網部に追いつめていきます。網部にきたら沈子部のリ

ング縄を引き、綱を袋状にしぼりあげる。ロープ曳は、潮流や風の方向によって操業方法も違ってきますので潮流や風を計算して、ロープや綱がいつもまるく円を描くよう操船することが大切です。また潮目ではロープと綱がもつれ、ほどくの苦勞するので細心の注意が必要である。

(1) 経営

経営については、収支状況の把握のため、簡単な記帳を行なっています。昭和58年1月から12月までの収支状況は表1に示すとおり総水揚量が18,507kg金額にして460万5千円、ロープ曳と刺綱の比率は約70%ロープ曳が占めています。

(2) 成果

ア、追込網での収入は父と二人で100万円であったのが、ロープ曳で約3倍の収入を揚げる事が出来た。

イ、経費は氷と油だけで33万9千円で済む。

その他ロープ曳の利点として

ア、人数が最低2人で操業できる。

イ、網の作成費用は45万から50万円で済み、一回作ってしまうと後の経費はそんなにかからない。

6. 波及効果

トビウオ漁業は昭和41年頃までは、14~15名で構成した追込網で漁獲していましたが、昭和42年に村役場の助成でまき網漁業の視察研修を行ない、そのまき網を応用し、昭和43年に当漁協の先輩がロープ曳による漁獲方法を考案した当漁協独得の漁業であります。

ロープ曳漁業の当初は2隻に5~6名乗り組み、2艘でのロープ曳が多かったが、1隻操業のロープ曳と比較して、漁獲差はそれほどなかったもので、現在、11組の着業船は全船1艘で操業しております。

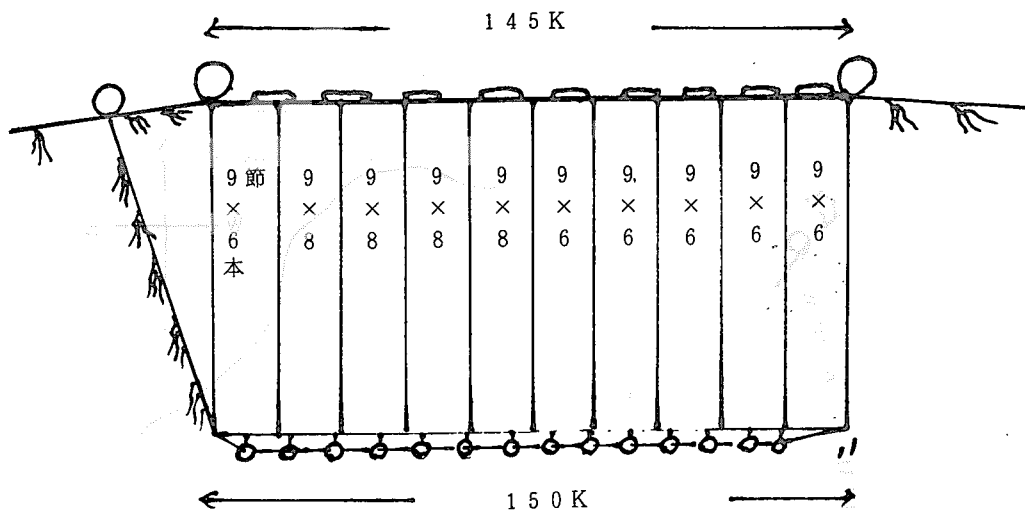
最近、他市町村から注目されるようになり、ロープ曳漁業研修のために島を訪れる漁業グループが多くこの漁業を導入した八重山漁協の2組によるトビウオの58年度水揚量は63トンの実績を上げています。

私個人について見ると漁業は重労働の割には収入は低いと感じられるが、すべてに主体的に取り組むことができ、他種漁業との切換え時期の判断等の操業形態をつくり上げることができる等、漁業の良さも実感しています。

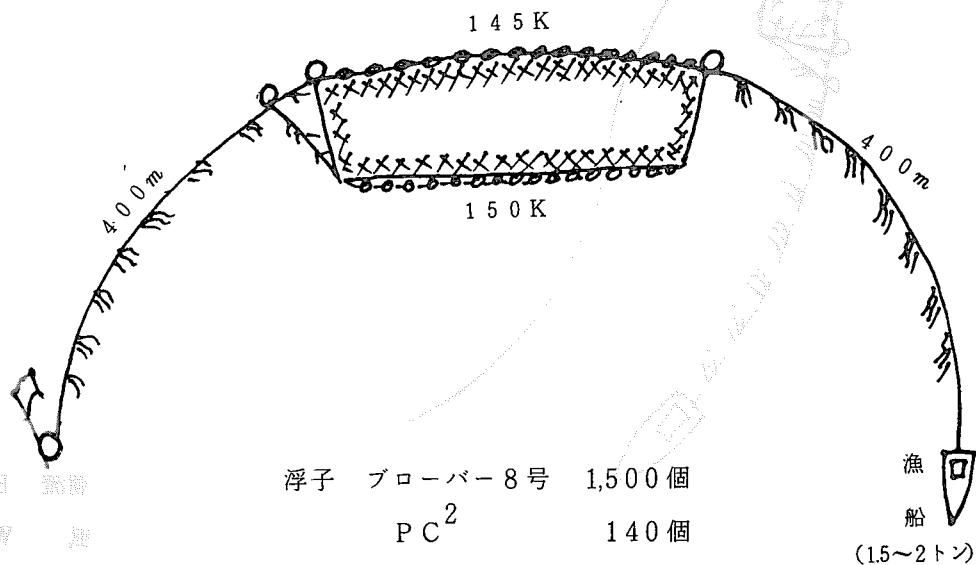
7. 今後の計画と問題点

トビウオの価格がkg当り、200円と安価で取引きされているために、生産活動が思うようにいかないのが現状であります。

私たち同業者と漁協との話し合いで、魚価の向上を第一目標として、販売方法の改善をはかることにし、関係機関と相談したところ、販売先などを探すために県漁連、漁協とで本土市場の調査を予定しています。また青年部活動中の話し合いの場もとだえがちとなっているので、業種別部門を置くための話し合いが進められています。さらに島の漁業発展を阻害している要因の一つとして、追込網及びトビロープ曳漁業は許可漁業でありながら、地先海面は自分達のものだとの考えかたが強いために、操業範囲が限られており、このために若者が後を継ぐ漁業の回生が図れないのが現状でありますので、現場に働く若者のなまの声が政策に反映されるよう希望いたしまして私の発表を終わります。

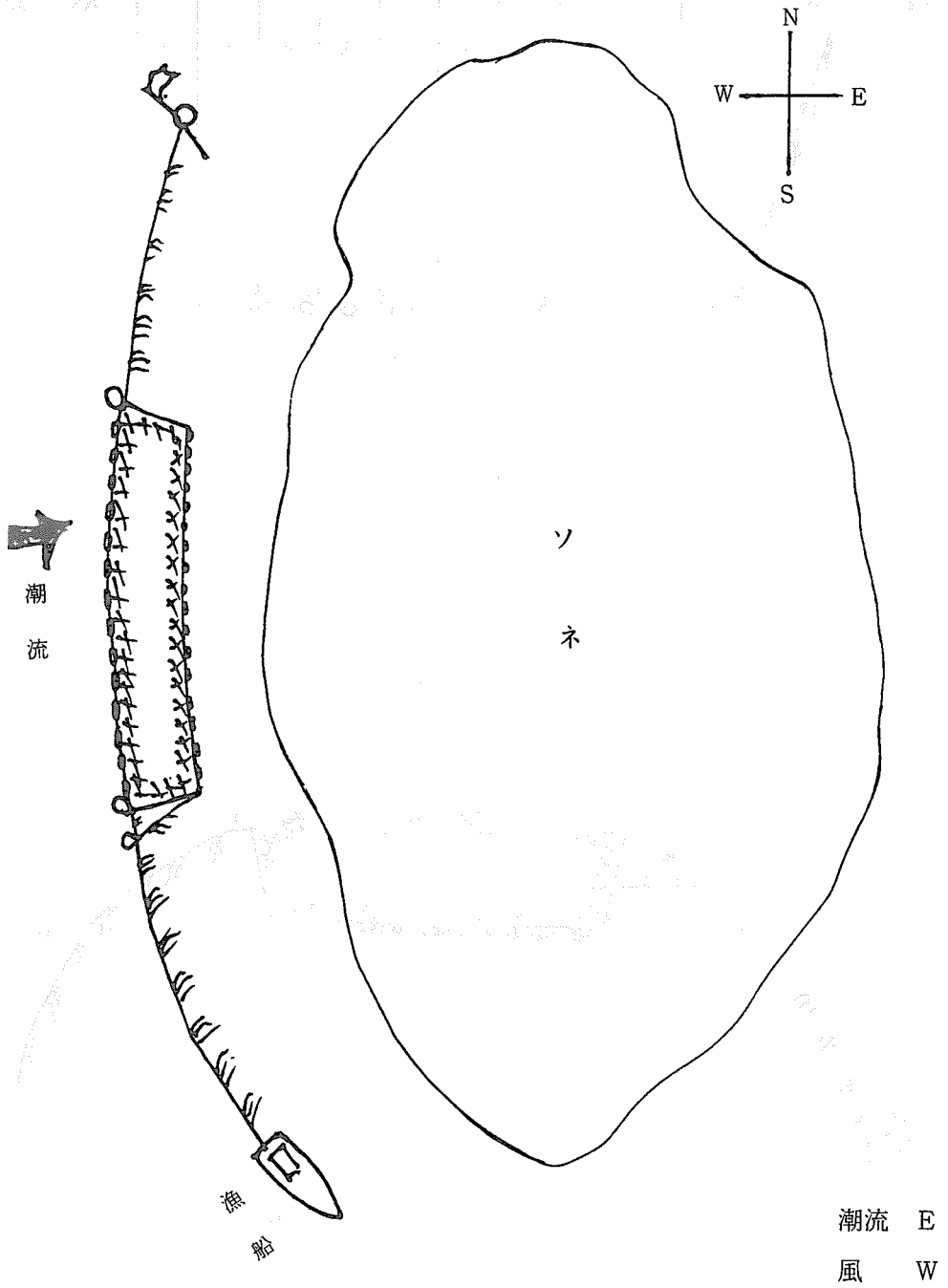


漁網 9節×6本=6反
 9節×8本=4反
 ロープ 6mm-2丸
 8mm-1丸
 7mm-1丸



浮子 ブローバー8号 1,500個
 PC² 140個
 鉛 10号 20kg
 リング用ステン棒5本 40個
 オドシロープ 8mm 4丸

図-1 構造図



図一2 操業図

表一. 経営

昭和58年度水揚状況

漁業種類	操業期間	魚種	水揚量 (kg)	水揚金額 (円)	平均値 (円)
トビロープ曳	4月～8月(75日)	トビウオ	15,881	3,213,350	200
刺網	9月～12月(51日)	ブダイ、アイゴ	2,626	1,391,500	530
			18,507	4,604,850	

大仲経費

漁業種類	経営内訳	計(円)
トビロープ曳	氷10円×100kg×75日	75,000
	油11ドラム×24,000円	264,000
刺網	氷10円×50kg×51日	25,500
	油51日×1,500円(ガソリン)	76,500
合計		441,000

総水揚額 4,604,850円

大仲経費 441,000

漁業純利益 4,163,850円